

マルコによる福音書 15 章 33 節－41 節
「本当にこの人は神の子だった」

《1》

次週はイースターを迎えます。2月17日以来、受難節を過ごしていましたが、この間、説教はずっと、ヨハネ福音書を続けて見てきました。

ちょうど、主の訣別説教と大祭司としてのお祈りの個所でしたから、内容的にも、時期的にもふさわしいと思われたからです。

そして今朝から、受難週に入りました。いつものヨハネ福音書を離れ、マルコ福音書から、主の十字架について見ていきます。

昼の三時に主イエス・キリストは大声で叫ばれた。「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」。この意味は、わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか。——この御言葉にまず、集中しましょう。

既に十二時に全地は暗くなっています。それが三時まで、三時間続きました。闇に覆われた中で、十字架の前に寄り集まった群衆の中には、暗い何かに心を驚掴みにされたような思いを抱いた者もいるでしょう。それは闇の力です。死と滅びの力。

もっとも群衆の中には、自分には関係ないことだ、自分たちは高みの見物しているだけだ、と強がった者もいるかもしれない。

そして、そのような彼ら以上に、天地自然のほうが、今のこの状況に鋭く反応しています。ふさわしい対応をしている。明るい日の光は消し去られました。罪がもたらす、死と悲しみと嘆き。その象徴である暗黒が、この時、この場ですべてを支配しています。

この中で、主のエロイ・エロイ・レマ・サバクタニがあります。では、この御言葉から、何を聞きますか？ 何を聞き取ればよいのでしょうか？

これは実に不可思議な言葉、と聞こえるかもしれない。なぜ、神さまから救い主として遣わされた神の子が、最後の最後に、このようなことを言われるのか？ 理解しがたい…。

誤った考え方が、いろいろあります。最初にそれを見ておきましょう。

いくつか挙げると、——イエスさまは、最後には十字架の苦しみから解放されると考えておられたのではないか。それなのに、その見込みは全く断たれてしまったとしか見えない。それで、絶望し、恨み、悲しんで、父なる神さまに文句を言っている。

あるいは、イエスさまは十字架の苦しみのあまり、うなされて、うわごとのようにして叫んだのではないか。

あるいは、イエスさまは恐れあまり、この窮状から助けてくださいと願っているのだ…。

いずれも違います。十字架の苦しみから解放されることは、救い主としての務めから外されること、職務を放棄されることです。確かにゲッセマネにおいて、主は、できることならこの杯を私から過ぎ去らせてください、と祈られています。

しかし、それはそこで解決したことです。「私の願いどおりではなく御心のままに」と祈られました。それがまたここで、主がそのことを望まれたと考えるのは、理に合わないでしょう。

また、苦しみや恐れがあったであろうことは、そのとおりでしょう。人間が受けるのと同じか、それ以上の苦しみ、恐れがあったでしょう。

ただし、このことを忘れてはならない。——主はどれほどの恐れ、苦しみを受けられたにせよ、その対処において私たち人間とは全く違う、ということです。

それはやはり神の子が人となられたのですから、罪とその影響においては、人間と全く違うのです。

恐れと苦しみの中で、罪人はそれに負け、怒り、恨み、呪い、嘆いて、死を迎えるのではないか。罪が最後まで、残ります。

しかし、一片の罪もないイエスさまが、十字架の死につかれる。罪なき御方が罪のゆえに死ぬ、ということです。

そういう意味で、罪人の死は当然なのに、主の死は本来、あってはならない死です。

しかし、主はそれを受け入れられました。その死において、恨みや嘆きなど何もないのは勿論のことでしょう。さらに、神の子に相応しい、神々しさ、威厳、輝きと言ってもよいようなことがあったでしょう。

主は私たちのために死なれました。そしてその死は、私たちが死ぬときに、そうなたたであろうというような死とは別の死です。ひと言で、神々しい死。

十字架の死は、そのようなものです。そして、その中で、エロイ・エロイ・レマ・サバクタニと言われました。わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか。

なお、この御言葉は、詩編 22 編の冒頭の言葉でもあります。

それで、主はこの御言葉を引用されている、と考える。だいたいの人が、そのように考えています。それはそれで、よいのだらうと思います。主イエスは常日頃、詩編を初め聖書（旧約）の御言葉を口ずさんでおられた。この時も、そうなのだ。

そして、さらに、詩編 22 編のその先を読むと、例えば 5 節には「私たちの先祖はあなたに抛り頼み、抛り頼んで、救われてきた」とある。

また 25 節では「(主は) 御顔を隠すことなく、助けを求める叫びを聞いてくださいます」と歌われています。

そこから、主が詩編 22 編を引かれたのは、結局この後、救われるとか、助けられるといったことを、言われているのだ、と理解するということもあります。

これも、そうなのだと思いますが、しかし、もしそれによって、この時の苦しみや恐れを軽く考える、という方向に行くようであれば、それは少し違うのではないかと、思います。

やはり、この時の恐れと苦しみには、耐え難いまでのものがあるはずで。

《2》

その上で、では、なぜ主は、わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか、

とまで言われたのか。最初の問いかけですね。

答えは、今までにも触れてきたことです。主の十字架の死は、私たちのための死でした。私たちが罪赦されて、神さまの御前で、正しい、まっとうな人と見做される。そして、神さまとの交わりの中で、喜んで、永遠の命に生きる。そのための死です。

そうであれば、主は私たちと全く同じになられなければならない。実際、そのとおりになっただきました。神の独り子が、まことの人として、私たちの住む世界に降って来られた、罪を除いては。

では、私たち罪人の状態は、どのようなものでしょうか。——罪人とは、まさに神さまに見捨てられた者たちですね。

罪人の呻きを、主はここで、大声で父なる神さまに向かって、投げかけておられます。

もったも、自分が神さまに見捨てられて、死と滅びに瀕している者だ、ということは、なかなか気がつかないでいる人の方が多いでしょうね。もし本当に、心の底からそれを知れば、すぐにも神さまに立ち帰って来るでしょう。

命と死、という問題。これはぜひとも、解決しなければならない問題です。この問題に正解を出して、そのとおりに生きるなら、その人生は本当に幸いな歩みです。

正解とは、最近連続で見られますヨハネ福音書の言葉で言えば、17章3節の御言葉です。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」。

そして、私たちは神さまを知る前には、神さまから全く見捨てられた者であったのだ、ということをお忘れなことです。罪が、そのように、神さまと、その救いと幸いとから、私たちを完全に切り離していました。

自分の罪の甚だしさ。これを忘れてはならない。エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ。こう叫ばざるをえない私たちでした。しかし主がその罪と悲慘のすべてを引き受けてくださり、私たちのために、そのことを叫んでくださった。

それでもはや私たちは、恐れと苦しみを自分の叫びとして叫ばざるをえない窮状から、救われています。

《3》

十字架の周りにいたのは、冷酷なローマ兵や野次馬だけではありませんでした。

百人隊長がいました。百人隊長というと、ルカ福音書には、僕をイエスさまに癒していただいた百人隊長がいます。

7章の冒頭です。7節で彼はこう言っています。「ひと言おっしゃってください。そして私の僕を癒してください。私も権威の下に置かれている者ですが、私の下には兵隊がおり、一人に行けと言えば行きます云々」。

イエスさまは、これを聞かれて、その信仰にとっても感心された、と言われている、あの百人隊長です。

それで、中には想像を逞しくして、この百人隊長と十字架の百人隊長は同一人物な

のではないかと考える人もいます。しかし、それは多少無理があるのではないのでしょうか。強いてそう考える必要もありません。

十字架の場面での百人隊長ですが、彼はイエスキリストのほうを向いて、そばに立っていた。一部始終を見ていたのでしょう。そして息を引き取られるのを見ると、言いました。「本当に、この人は神の子だった」。

彼のこの述懐、これはまた告白、信仰告白と言ってもよいでしょうが、これはどこから来ているでしょう。

人間的なことで言えば、それはやはり、ふつうの人間の死とは違うところからでしょう。まことの神の子が罪以外まったく人と同じになられて、罪人のために死なれた。そこにはおのずから、彼の心の目で初めて見ることでできた光や輝きが、あったことでしょう。

そして霊的なことでは、何よりも神さまの導きがあって、その思いへと到ったということですね。私たちが誰でも、神さまから霊的な真理を与えられて、心からの信仰告白ができることと、同じです。

さらに、十字架の周りには、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた、とあります。

主がガリラヤにおられたときから、主に仕え、主に従って、エルサレムへと上って来た多くの女性たちです。

その中にマグダラのマリヤがいますが、彼女は復活の主にお会いしたことが記されているなど、いわば名の通った人ですが、多くの人は名前も上げられていない無名の人たちです。

しかし、そのような彼女たちが、十字架をずっと見守っていました。また、この後、主の十字架の証しをしたことでしょう。

百人隊長も多くの女性たちも、十字架の主イエスキリストを見つめ続けました。そして主の救いと赦しを、証しました。

罪による死と滅びに打ち勝つ、主イエスキリストの命と恵み。この命と恵みを見つめ続け、そして証ししていく。

受難節のこの時、私たちが召されているのは、このことでしょう。

2021年3月28日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を讃美いたします。

主は、わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか、と叫ばれるまでの苦しみを、十字架の上で受けられました。

それはただ、主が私たちのために、罪なき御自身を、罪人である私たちと同じものとしてくださった恵みによることです。

主は十字架の上で、私たちが生きるための大切な、死と命の問題について、本当の解決を与えてくださいました。

どうか主に拠り頼んで、罪の確かな赦しを受け、いつまでも喜んで、本当の命に生きる者とされますように。

十字架を見つめ続けることによって、初めて、復活の恵みも確かなものとされることを、覚える者とさせてください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司